

—「木材塗装」特集にあたって—

Special Feature: Coatings for Wood

壁谷 英雄

木造建築物の耐久性は、建築手法と使用する木材の質、及び塗装によって大きく左右される。我が国の草創期に中国から渡来した人々によって伝えられた木造軸組みによる建築手法は、その後の木造建築物の基本となり現代に生きている。

世界最古の木造建築物とされる「法隆寺」は、607年に建立されたが、「日本書紀」によれば、大化の改新以後に続く混乱の中で670年に焼失したとされている。法隆寺金堂の屋根裏に使用されている木材の年輪年代測定によると、690年代頃に今の場所に再建されたようである。また、同じ飛鳥の地に建てられた「薬師寺」は、680年に発願、698年に建立されたが、平城京遷都により、718年に現在の場所に移築され、730年には東塔が建立されている。その後、1528年の兵火により、東塔を除く伽藍が焼失したが、1976年の金堂落慶以降、順次再建が進められている。特に、1981年に落慶した西塔は、塔の連子窓に「青（あお）」色が塗られ、扉や柱は「丹（に）」色に塗られており、1300年の風雪に耐えてきた東塔（現在、解体修理中）と比較すると、「青丹良し」と表現された往時の鮮やかさを蘇らせると共に、塗装による耐久性向上の効果を垣間見ることができる。

このように木材塗装は、木造建築物の耐久性向上に不可欠であり、特集記事では用途に応じた塗装仕様の選び方が示されると共に、防腐、防カビ、防虫効果などの新たな性能規定の必要性が記載されている。加えて、昨今関心の高い「環境対応型塗料」や「健康配慮型塗料」の重要性も示唆されている。

一方、木材は、樹種によって耐久性が異なる。日本農林規格（JAS）には、木材樹種の耐久区分によって、腐朽菌に対する耐性の度合いが示されているが、最も耐久性に優れている「檜」は、多くの寺院建築に用いられてきた。また、近年は、「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律」が制定され、木材の利用促進が図られている。公共建築物等における木材利用の促進スキームは、国が率先垂範して木材利用を進めるために、低層の公共建築物は原則として全て木造化を図ることとしている。更に、法律、技術基準の整備、及び予算支援によって、公共建築物における木材利用拡大による直接的効果に加えて、一般建築物における木材利用を促進する波及効果を期待していることから、今後、木材塗装への関心は高まるであろう。

木材は、構造材と仕上げ材、あるいは外装材と内装材といった二面性を持つ使い易い材料であるが、利用促進に際しては防火性、耐腐朽性、及び寸法安定性の更なる改善が不可欠であり、これらの課題を塗装によって補完し得る技術開発が望まれている。また、森林資源の減少によって低品質の木材やエンジニアリングウッド（MDF や LVL など）の性能を向上させる塗料開発への期待も大きい。

本特集の執筆は、木材塗装の分野で著名な方々をお願いしたものであるが、多忙な中であって記事を投稿戴き感謝に絶えない。誌面を通じて、篤く御礼申し上げる次第である。

なお、特集に併せて、冒頭に論文が掲載されているが、期せずしてその内容が木材塗装に関わるものとなったことは、望外の喜びである。